
伝染する狂気

VAICE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝染する狂気

【Nコード】

N6666R

【作者名】

VAICE

【あらすじ】

帰省してみたら突然地獄に巻き込まれた！？

シリアス基調の気分しだいでコメディーありの一応ホラーストーリー

！！

狂気の開宴（前書き）

皆さんはじめまして！

VAICEと申します！

なにぶんはじめてですので所々「は？お前小説なめんなよ？」的な部分ありまくりですがよろしくお願い致しますm（　　）m
それではどうぞ！

狂気の開宴

それはまさしく「地獄絵図」という言葉がぴったりな光景だった。

燃え盛る家、崩壊した商店、乾いた血のこびりついた外壁。そしてなによりも――

「あゝあゝ！あゝアゝあゝあゝ！」

呻きながら、または叫びながら行進する人間の、いや、正しく言えば「元、人間」だろう。の群れ

何故「元」なのか？

それは彼らの共通点である。

彼らの共通点、それは

「心臓が止まっている」

という所である。

そう、彼らは

「歩く死体」なのだ。

ある者は片目が飛び出し、またある者は腹に大穴を開けている。

しかし、動いている。その姿はまさしく「化け物」 血まみれの

化け物が闊歩する崩壊した街。

どこからともなく聞こえる悲鳴。

まさしく「地獄」

・そんな地獄の中を走る一人の少年がいた。

彼の名は「久遠 冥也」

サラサラした黒髪に黒い眼、整った顔立ち、引き締まったしなやかな四肢。俗に言うイケメン、細マッチョってヤツだろう。年齢は18歳くらいだろうか。

久遠「ハアハア…クソ…ッなんなんだあいつ等は…せっかく帰省してみれば…」

冥也は酷く混乱していた。無理もない、帰省してすぐ、襲われたのだから。

「あゝあゝアゝあ！」

冥也「ちっ…どんだけいるんだよ…」　そもそもなんなんだあいつ等は？

そしてこの街は一体何があっただんだ！？

前に見たこの街はこんな地獄などでは無かった。ましてや、あんな化け物はいなかった。

俺がいなかった三年間に何があっただんだ！？

この街ははつきり言っただけ好きでは無いが少なくとも活気に溢れた街だったはずだ。

冥也「…クソッ逃げるか…」

再び冥也は走り出した。

幸い奴らは足は速くない。散歩くらいの速さだ。ただ、大量にいる。そしてとてもしつこい。

目の前に数体いるが冥也はそれを華麗なステップでかわす。そして再び走る。

そして冥也が辿り着いたのは小さな公園。

冥也が小さい頃、よく遊んだ公園だ。

しかしその公園も昔の面影はなく、ただ破壊され尽くした跡があるだけだ。

その公園をぼんやり見つめながら冥也はこれからのことを考える。

冥也「まずは武器…武器が必要だな」

？「おいおい？、まさかの武器の無しにここにいるのか？」

冥也「…っ!？」

驚いて振り返った冥也の前にいたのは

冥也「…鱗斗…か？」

ワックスで上に向かって固めた金髪、筋骨隆々の肉体、遠目から見たら超サ。ヤ人に見えなくも無い。ってかそうとしか見えない。まあ遠目にみたら、だが。

彼は「西条 鱗斗」

冥也の幼なじみだ。

鱗斗「久し振りだな〜め〜君」

冥也「黙れよ？シバくぞ？そしてロープで縛ったあと、瀬戸内海に投げ込むぞ？」

鱗斗「冥也は相変わらずのドSだな〜」

冥也「うるせえよ」

鱗斗は相変わらずだ、と冥也は思う。　この軽い明るさが一匹狼の冥也に仲間を教えてくれた。　口では酷いことを言っているが心の底では冥也は鱗斗に感謝していたりする。

鱗斗「あ、そうだ武器だろ？　ホラ、あげる」

冥也「あ？　武器ってなんdえ、ええええ！！！！？　なんでえええ！！！！？？」

鱗斗が冥也に差し出したのは「ベレッタM92F」拳銃だった。

鱗斗「まあまあ、いいじゃんいいじゃん」

冥也「いやいや！　良くねえよ！　なんでお前がこんな物騒なモンを！？　つかあいつ等はなんなんだ！？　この街はどうしちまったんだ！？」

疑問が浮かんで膨らんでいく。　冥也はパニック状態に陥ってしまっていた。

鱗斗「分かったよ、分かったから落ち着けめ、君俺が知っていることは全部教えてあげるから」

そして鱗斗はゆっくりと話し始めた。

狂気の開宴（後書き）

どうでしたか？

はい…ダメですね…（泣）

色々ダメな部分があると思いますので、ご指摘、感想の程よろしくお
願い致しますm（　　）m

ハジマリ（前編）

・それは冥也が街に帰って来るちょうど一週間前のこと。
鱗斗は街を友達ましまの真島 宗太そつたと一緒にうるついていた。

鱗斗「いやゝ今日も平和だねゝいゝ」

宗太「まったくだゝ」

鱗斗「こんな日がずっと続けば良いのになゝ」

宗太「大いに賛成するよ」

そんなことを喋りながら二人は商店街へと歩みを進める。

宗太「ん？何だアソコ？ 人ばかり出来てるぞ？」

鱗斗「あ、ホントだ。まさか… A○B4○？」

宗太「お前は本当に脳内パライスだな」

二人は人だかりの出来ている店の前に行った。

人々が口々に叫んでいる。

「おい！！あんたバカなことは止める！！」

「落ち着けて！ な？」

とりあえずなんかただならぬことが起きているらしく、場の空気が張りつめている。

鱗斗「なあおっさん、何があつたの？」

おっさん「ん？ああ鱗斗か！？あそこを覚えてみる！」

そう言っておっさんは建物の上を指さす。

そこには・

鱗斗「…ええ？」

一人の男が今にも飛び降りんとしていた。

宗太「…あそこから落ちたら間違い無く死ぬな」

鱗斗「どっしょどっしょ！？…ん？」

宗太「鱗斗？どうした？」

鱗斗「アイツ…眼が普通じゃない…アブノーマルだ…」

宗太「最後は聞かなかったことにしといてやる。マジで普通じゃないのか？」

鱗斗「…うん…」

ちなみに鱗斗の祖父はマサイの戦士だったらしく、その血を継いでか鱗斗の視力は異常に高い。

宗太「どんな感じで普通じゃないんだ？」

鱗斗「なんて言うか…雰囲気が違う……」

男の眼は一見しただけでは普通に見える。

いや、そもそも死を目前にしといて普通に見えること自体おかしいのだがとにかく。

その眼の奥が冷たく、どんよりしている。

まるでこの世界など見えていないかの様に。

宗太「ふーん…まあ、自殺しようとしてるヤツの眼なんてそんなもんか…」

違う。違う。違う。違うんだ。

アイツの眼は人間じゃない。

そう思った刹那、男が飛び降りた。

鱗斗「…っ！！？」

鱗斗はヒヤリと背筋に悪寒を感じた。

鱗斗は見てしまったのだ。

男が飛び降りた時、かすかに笑ったのを。

それは狂人の笑い。見る者全てを凍りつかせる紛れもない「恐怖」の塊。そして、男は地面に激突した。

恐らく即死しただろう。あの高さから落ちたんだ。当たり前だ。それを示すように側頭部から血が溢れ出している。恐らく割れているだろう。

宗太「……」

鱗斗「……」

数分後、警察と救急車が到着した。

男は担架に乗せられ、救急車に運び込まれようとしていた。

その時、男はいきなり眼を開いた。

救急隊員「！！　おい！？この人生きてるぞ！！！」

男「……」

救急隊員「聞こえてますか！？　大丈夫ですか！？」

男「……あゝあゝあゝ！！！」

救急隊員「…ひっ！！？ギヤあゝあゝAあゝアゝアゝ！！！！！！！」

身を切り裂くような悲鳴が街に響き渡った。

その悲鳴は初めて聞くが明らかな「断末魔」の悲鳴。

鱗斗「……っ！？」

宗太「……うえ……」

断末魔の出所、それは男が救急隊員の胸板を「喰い千切った」ことによるものだった。

男はそれがどうした、と言わんばかりに隊員の体を喰らわんとしている。

その時、

「おい！！テメエ何してんだ！！！」

鱗斗「宗太！？」

宗太が男を隊員から引き剥がした。

宗太「おい！！テメエ何やって…っ！？」

宗太が言い終わる前に男は宗太を押し倒した。

宗太も視た。男の冷たく、死に絶えた眼を。

宗太「…ひっ!？」

そして男は宗太に覆い被さろうとする。

宗太「ひっ!…止め…来るな!」

宗太は半狂乱だった。必死に抵抗するが中々剥がれない。

宗太「止めるおおおおお!!!!!!」

宗太は男の顔に手を出した。

グチャツ

宗太「……っ!?!…うゝあゝあゝあああ!!!!!!」

肉を喰い千切る音と共に宗太の手が四分の一程消失した。

男が「喰った」のだ。

鱗斗「宗太!？」

ハジマリ（後編）

鱗斗は半狂乱になっていた。目の前で友達が血まみれになっているのだから。

宗太「痛えっ…！痛えよおお…！！！！ 鱗斗お！痛えよお…！！！」

鱗斗「そ…宗太あつ！」

鱗斗は宗太に向かって駆け出した。周りが何か叫んでいるが関係無い。

その時、横から何かが鱗斗に覆い被さって来た。

鱗斗「うぐえっ！？」

「あ…ア…アあ…」

鱗斗「！？」

鱗斗は驚愕した。

何故なら、鱗斗に覆い被さって来たのは、

あの胸板を喰いちぎられた救急隊員の「死体」だったからだ。

「あ…アあア…」

隊員は顔を鱗斗に近付ける。

「アゝアゝあ…」

鱗斗「うゝ…来るんじゃないよ！」

鱗斗はありったけの力を出して隊員の頭を引き寄せ、そのまま地面に叩きつける。

その拘束の緩んだ一瞬のスキについて隊員の腹を膝で跳ね上げ、そのまま脱出する。

鱗斗「宗太！」

辺りを見回すが -

鱗斗「宗太！？ 宗太！？」

宗太はいなかった。

しかも -

「あゝアゝあゝアゝアゝ」

「アゝゝ…ヴあ…」

鱗斗「うえっ！？増えてる！？」

さつきまで2体しかいなかったゾンビ達がいつの間にか10体ほどに増えていた。

鱗斗「ちきしょう…仕方ない」

逃げるしかない。

そう判断した鱗斗はこの場を全力で離れようとしたが

鱗斗「…ん？」

地面に何か赤黒いものが点々と付着している。

どうやら血痕のようだ。

鱗斗「どこから…？」

この血はさつきの人だから続いている。

まだ叫び声が続いているのを見ると、まだ犠牲者は増えているようだ。

鱗斗「まさか宗太…？」

とりあえずさつきのゾンビ達に気をつけながら血を追ってみる。

そして血を追うこと五分。

十字路の真ん中で血はそこで急に止血したようにぱったりと切れていた。

鱗斗「…なんだったんだろう？」

鱗斗は考える。

あれは何なんだ？

なんで俺達が？

鱗斗「…頭痛くなつて来た…考えんの止めよ…」

鱗斗はとりあえず自宅に帰ってみることにした。

大分気持ちは落ち着いていた。

鱗斗に両親はいない。中学校に入学した時くらいに突然

父「俺は中東で石油王になる！」

とか言つて本当に行つてしまった。

母はノリでついて行つた。

その後半年ぐらいしてからアラブの油田でスイミングをして日本人の男が捕まったらしいがまあ知つたこつちや無い。

そして家に帰つてみたが―

鱗斗「…なんかいるし…」

案の定、ゾンビが2体いた。

その内の1体がこちらに気づいた。

「あゝ…アゝ ああ」

鱗斗「…流石に慣れたかな」

そう言つて鱗斗は目の前のゾンビに駆け込むと、そのまま商店街の店で買った園芸用の支柱（やや太め）で首を叩いた。

ベキヤツという嫌な音と共に首の骨が折れ、そのまま二度目の死を迎えた。

鱗斗「んゝ意外に楽だな」

鱗斗は迷いや躊躇といった感情が薄く、大概のことは直ぐに行動する。

鱗斗「んゝなんか食べ物あるかな」

鱗斗は台所に移動するとテーブルに見るからに怪しいスイーツケースがあった

「M3シューテーター」(ショットガン)×1(弾×50)

だった。

鱗斗「…物騒過ぎるよ」

かくして地獄は始まった。

思案と再会

鱗斗「と、まあこういうことだけど……なんか質問ある？」

冥也「まあだいたいには分かったけど……お前は俺と会うまでどこにいた？」

鱗斗「？えーっと……コンビニにバリケードはってエロ本読み漁」冥也「消え去れ」

とりあえず首に裏拳を決めた。

「鱗斗…ぐすん…冥也のムツツリスケベえ…」

冥也「もう一発いつとくか？そして逝つとくか？」

鱗斗「すいません すいません すいません すいません すい
ません すいません すいません すいません」

冥也「…はあ…んで、なんでせつかくのコンビニから出てきたんだ？」

「えっ……散歩？」

よし、土に還してやろう

鱗斗「すいませんすいません吸いませんすいませんすいません吸いません」

冥也「何を!？」

ってか今コイツ心読んだ！？

冥也「…はあ…まあいいや とりあえず街を出るぞ」

鱗斗「は〜い」

そして二人は歩き始めた。

鱗斗「…ねえ…ゾンビの数、多くない？」

冥也「……確かにな」

確かに多すぎる。

事実、冥也達の後ろには20体以上のゾンビが転がっている。

冥也「この分じゃ街の人間のほとんどはゾンビになってるかもな…」

鱗斗「かもね〜…」

そして二人は街の端、街から唯一外出るための橋に辿り着く。

この街は水上都市で、海に打ち込まれた柱の上に存在している。

柱は高く、30メートルくらいある。

冥也「……マジか」

鱗斗「は…ハハ…」

その橋が堕ちていた。

鱗斗「……うぎゃああああ！！！！！！……？……？……どうすんの！？ねえ一体どうすりゃ良いの！？何！？ここで二人仲良くお茶漬けのお茶のお茶っ葉になれと！？いやだああああ！！！！！！……まだいやだああ！！！！……せめてポカリを一年ぶ」冥也「いい加減黙れ」

一人勝手に脳内暴走列車が終点を越えて突っ走る鱗斗を黙らせ、冥也は考える。

さて、どうしたもんか……飛び降りるにしては高すぎるし、柱をつたって行くにも柱がデカすぎて掴めないし……うぐんどうしたm鱗斗「うぎゃあああ！！！！いやだあああ！！！！」冥也「海に沈め」

全力で鱗斗の側頭部に回し蹴りを喰らわす。

鱗斗「我が人生に一片の悔い無し！」

冥也「拳王様！？」

鱗斗は某世紀末の拳王様の言葉を吐き、気を失った。

冥也「……さてどうすりゃ良いのだから……」

一人思案にふける冥也だが――

??「あれ？めー君！？」

と、突如後ろから女性の声がした。

冥也「っ!？」

驚いて振り向くとそこには――

冥也「……奏か？」

奏「やっぱりめー君だあ!!久しぶり!!会いたかったよおお!!」

と言つなりいきなり抱きついてきた。

冥也「!?!ちよ…おい!?!止め…」

鱗斗「…!?!おゝ奏かゝ無事だったん」奏「めー君!!めー君!!」

冥也「……」

あのクールな冥也が照れて何も言えなくなるこの女性

瀬川^{せがわ} 奏^{かなで}少し茶色のかかったポニーテールに大きめの瞳、整った鼻梁に小さな唇。

周りから見れば間違いなく美少女と言っだろう。

そしてなによりも

冥也が想いを寄せている人物である。

冥也「…奏…離れてくれ…苦しい…」

奏「?なんで？」

冥也「…その…なんだ…密着し過ぎて…」
真っ赤になって冥也は答える。

奏「…ぷっ!!…あははは!!めー君可愛いっ!!」
冥也「…ウルサイ…」

奏「んゝ何ゝ??聞こえなゝいなゝ??」

冥也「…っゝ…」

二人仲良くいちゃついているのに対して――

鱗斗「…ねえゝ…そろそろ気づいてもよゝ」

奏「あはははは!!」
冥也「…っゝ…」

鱗斗「…えぐっ…ぐずっ…いいもん…どうせ僕なんて…」

一人体育座りして地面に「の」の字をひたすら書く鱗斗であった。

乱戦 混乱 危機（前書き）

鱗斗君が活躍します♪

冥也「…主人公は俺だぞ？」

あゝわかったわかった。その内な。

冥也（…殺す）

乱戦 混乱 危機

鱗斗「どうせ僕なんてどうせ僕なんてどうせ僕なんてどうせ僕なんてどうせ僕なんて」

冥也「な…なあ鱗斗？ごめんね？…なあ…ホントに悪いと思ってるから泣き止もうな？な！？」

奏「ん…？？鱗斗君？何泣いてるの？それにめー君？なんで謝ってるの？」

鱗斗「どうせ僕なんてどうせ僕なんてどうせ僕なんて」

奏と再会してから約一時間。

その間ずっと放置されていた鱗斗がとうとう泣き出してしまい、それに気づいた冥也が鱗斗を必死に慰め、奏は何で泣いているのかが分からず頭に38個くらいの疑問符を浮かべている。

冥也「り…鱗斗…！」

奏「ん…？？…なんだか分からないけど鱗斗君？サラミあげるから元気出して？」

鱗斗「わ…い！！サラミ…！！」

鱗斗はサラミと言う名の強力な蘇生薬により完全復活し、副作用と

して冥也のテンションは地球の中心を貫き反対側のブラジルまで落ちていった。

冥也「どうせ俺なんてどうせ俺なんてどうせ俺なんてどうせ俺なんて」

鱗斗「…なんかごめん
奏「???」

ちょうどその時だった

「う…Aアアあ…」
「イあア…う…」

大量のゾンビ達が向かってきたのは。

鱗斗「!?めー君!?!あれ!」

冥也「…ぐずっ…何だよ?…っ!?!」

一瞬恐怖と緊張で体が硬直するが直ぐに戦闘体制に入り、ベレッタを構える冥也と鱗斗。

冥也「奏は隠れてろ!!」

奏「え?...あ...うん...」

奏は瓦礫の影に隠れる。これならゾンビ達からは見えなだろう。

鱗斗「あ、とりあえずコレ持ってなね」

と言ってイングラムを渡す。

冥也「...いくぞ...」

鱗斗「わかったよ...」

ゾンビ達との距離はおよそ50メートル。十分射程圏内だ。数はおよそ40体、恐らくどうにかなる数だ。

冥也は慎重に狙いをつけ、深呼吸をする。

そして一気に引き金を引き絞った。

ダアンッ!

というやや重めの音と共に銃から小さな火炎が吹き出し、手首にガツンと衝撃が伝わり、狙いをつけていたゾンビの頭に穴が空き、吹っ飛んだ。

冥也「よし…」

冥也は小さくガツポーズをする。

鱗斗「あー！僕だつて！」

そして鱗斗もベレッタを構え、命中させる。

負けじと冥也もベレッタを連発する。

しかしそこはやはり素人、命中率は五分五分といったところだ。

冥也「…くそおっ！！」

しかも――

冥也「なんで当たってるのに止まんないんだよっ！？」

そう、ゾンビ達は足や心臓に弾が「当たって」いるのに「止まらない」のだ。

冥也「…くそおっ！！何でだよっ！？」

冥也はかなり焦り、冷静さをほとんど失ってしまっていた。

その隣で鱗斗はゾンビ達を次々と倒していく。

鱗斗「なに騒いでんのさ？集中出来ないよ？」

冥也「鱗斗！お前どこ狙って倒してんだ！？」

鱗斗「？　こーゆーのって頭を狙うのがベタじゃないの？」

冥也「……………あ……」

そう、冥也は初撃以降頭はさすがにマズいと思い、頭をほとんど狙ってなかった。

狙いをつけ間違って頭に当たったゾンビもいたのだが、それはごく僅かな数だった。

冥也「はあ…やっぱりこうしなきゃあダメか……」

やれやれ、と言った感じで銃を構え直す。

そして次はゾンビの眉間に狙いを定め、

一気に引き金を引いた。

距離が20メートル程まで接近していたゾンビは一撃で眉間に穴が空き、そのまま二度目の死を迎えた。

冥也が確認できる限り、残りは15体程。

もう少しだ。と自分を叱咤激励しながら銃を構え直す。

その時だった。

「うっ…アッ ああ…」

冥也「…っうわっ!？」

と言う低い唸り声と共に冥也の体が押し倒されたのは。

鱗斗「めー君!？」

冥也の声に反応した鱗斗が見たのは瓦礫から上半身だけを出したゾンビが冥也に覆い被さっている光景だった。

慌てて鱗斗は銃を構え引き金を引くが

カチッ

と言う音と共に銃身の上半分が後ろにスライドした。ホールド・オプン（弾切れ）になってしまったのだ。

鱗斗「！！…しまっ…やべっ！！」

慌ててマガジンを詰め替える。

すると

「あゝ…う…ガ」

前方からの唸り声に反応するとゾンビ達との距離は5メートル程まで詰まってしまっていた。

冥也「良いからさっさとそいつらを終わらせる！！自分のケツくらい自分でふける！」

額から汗を流しながら冥也が叫ぶ。

無理をしているのは明らかだ。

めー君の為にもさっさと終わらせる。

そう切り替えをした鱗斗は一度距離をとり、万が一の時の為、腰に差してあったナイフを構え、片手で構えたベレッタから一発打ち込む。

それは一体のゾンビの左目に当たり、盛大に血を零しながら吹き飛ぶ。

その時運良く後ろにいたゾンビを巻き込み、瓦礫の角に頭が刺さりブチュッ！！と嫌な音と共に絶命する。

残りは8体。

鱗斗はすかさずゾンビの集団に突貫する。

チラツと冥也を見たがなんとかゾンビの首を抑え、回避していた。

内心焦りながらも鱗斗は行動を開始する。

まず回し蹴りで先頭にいた一体の首を折り、回転の勢いそのままにナイフをもう一体の右こめかみに突き刺す。

ナイフを抜いた時に二体のゾンビがふらふらと近寄ってくるが遠い方の一体はベレッタで撃ち殺し、近い方の一体は後頭部を掴み、そのままコンクリートの瓦礫に叩きつけた。

残りは4体

再び突貫し回転しながらナイフをふるい、一体の命を刈り取る。

そしてベレッタを構え、引き金を二度引く。

ダアンッ！！　ダアンッ！！
という銃声と共にゾンビが倒れる。

そして最後の一体に向かってナイフを突き刺し、ゾンビ達は全滅した。
それと同時だった。

「うがあっ！！」

冥也の叫び声がしたのは。

鱗斗「めー君！？」

慌てて振り向いた鱗斗が見たのは頭を抑えつけられ今にも噛みつかれんとした冥也だった。

狂走曲「約束」(前書き)

作者「さあ！！シリアスが多めです！」

冥也「これはネタバレにならないのか？」

作者「多分大丈夫っす！！」

冥也「…不安だ」

作者「さあ！スタート！！」

狂走曲「約束」

鱗斗「めー君！？めー君！？」

鱗斗は慌てて銃を構えるが、

鱗斗「……！！」

撃てない。あまりにも冥也とゾンビが密着し過ぎているのだ。

もし、下手に撃てばそれは間違いなく冥也の命をも奪ってしまうだろう。

ナイフを投げようとゾンビの死体から引き抜こうとするがナイフがゾンビの頭に刺さったままで抜けなくなっていた。

鱗斗「……！！うゝあゝああああ！！！！！！」

と叫びながらゾンビに駆け込もうとした時――

ベキヤッ！

と嫌な音がして冥也の上にいたゾンビが吹っ飛んだ。

鱗斗「ほえっ!？」

と鱗斗は素っ頓狂な声をあげてその場に静止してしまう。冥也も驚いた顔をしている。

それもそのはずだろう。

冥也を助けたのは――

冥也「……奏？」

そう、奏だった。

しかし、いつもとは纏っている雰囲気まるで違う。

顔には表情らしきものは一切無くなり、何事かをブツブツと呟いている。綺麗だった両眼から光は消え去り、真っ黒な瞳がゆっくりと起き上がっているゾンビを映しているのみである。

奏「……………」

「うゝア…ガア…」

完全に起き上がったゾンビは片足をあらぬ方向に曲げながらも奏に近寄ってくる。

冥也「…奏！」

冥也は奏を助けにしようとした瞬間――

奏「めエ君八動かなイデ」

その無機質なロボットの様な声に冥也は全神経が一瞬で支配されたかのようにその場から動けなくなった。

冥也「……え？」

困惑する冥也のことなど意に介さず、奏は目の前のゾンビのようにフラフラとゾンビに近寄った。

「ア…えあゝガ…」

ゾンビはなおも近寄ってくる。

奏「……め……を…い」

奏はまだブツブツと呟いている。

「ガア…あゝあ！！」

ゾンビが奏に襲い掛かる。

奏がやられる――！

冥也のそんな不安は杞憂だった。

奏がゾンビの顔を思いつきりイングラムで殴りつけたのだ。

派手な音と共にゾンビが吹っ飛ぶ。

そんなゾンビに次は奏が襲い掛かった。

馬乗りになり首を締め上げながら抑えつける。

そして、その顔にイングラムの銃口を押し付けた。

パラパラララ――！！

古いタイプライターの様な音と共にゾンビの体がビクビクと跳ね上がる。

それでもなお、奏は撃つのを止めない。
マシンガンの反動があるはずなのに奏の腕は固定されているかのよ
うに微動だにしない。

その銃撃音に交じって奏の呟きが聞こえてきた。

奏「めエ君ヲきずツケル奴ハ許サナイめエ君ヲきずツケル奴ハ許サ
ナイめエ君ヲきずツケル奴ハ許サナイめエ君ヲきずツケル奴ハ許サ
ナイめエ君ヲきずツケル奴ハ許サナイ」

気付けば銃声はとっくに止んでいた。

代わりに聞こえてくるのはグチャッグチャッという不快な音。

奏が瓦礫をゾンビの崩れた顔に叩きつけている音だった。
その姿を見て、冥也は我に帰った。

冥也「奏！もう大丈夫だから落ち着け！！」

奏は瓦礫を打ち続けながら顔だけを冥也に向けた。
その顔は真っ黒な笑顔だった。

奏「なんで？コイツハめエ君ヲきずツケタ奴ダよ？」

誰に言うでもなく鱗斗はボソツと呟いた。

鱗斗「んで？めー君怪我してない？」

冥也「…ああ…大丈夫だ…すまなかったな…また俺のせいで奏が…」

鱗斗「…大丈夫…冥也は悪くないよ…今回も…あの時も…」

冥也「…あの時以来だな…お前が俺のことを名前で呼ぶなんて…」

鱗斗「…そうだね…それに冥也は優しすぎる…あんな化け物相手に…頭を狙わなかったのはできるだけ傷つけたくなかったからでしょ？それに僕をできるだけ危険にさらさないように自分が危なくなつたのにあんなこと言つて…まったく馬鹿なんだから…」

冥也「お前には全部筒抜けか…」

鱗斗「当たり前でしょ？何年一緒にいると思つてるの？………少しは僕にも頼つてよ…そのために強くなつたんだから…」

あの時交わした約束、

お互いにもつと強くなってお互いに頼れる存在になる

あの約束を果たすために冥也はアメリカに渡った。全ては奏のために、宗太のために、

そして、鱗斗のために

鱗斗「まあ…とりあえず次からはあの化け物相手にも容赦しちやダメだよ？」

冥也「わかった…」

鱗斗「まあ…どうしてもダメな時は僕がやるから…」

冥也「ああ…ありがとう…」

鱗斗「改めて言われると…照れるな…」

冥也「……………」

鱗斗「……………」

重苦しい空気が二人の間に流れる。

鱗斗「あ！ところでさ」

明るい声でそんな空気を破ったのは鱗斗だった。

ああ、コイツはこういうヤツだったな、と冥也は思い、口の端に小さく微笑を浮かべる。

昔からコイツには随分と助けられて来た。お前には随分と頼ってんだよ。

まあ口には出さないが

鱗斗「ん？何笑ってんの？」

冥也「いや…なんでも無い…ところでなんだ？」

鱗斗「ああそうそう…何でめー君はそんなに銃の扱いが上手いの？リロードも速かったし、まさか…使った経験アリ？」

冥也「ああ、あるよ」

その瞬間鱗斗が後ろに引いた。

鱗斗「ま…まましゃきゃ…ひゅい…ひゅいとぎよろしを…（訳、ま…まさか人殺しを…）」

冥也「んな訳あるか。アメリカにいた時に親父に射撃場に連れて行

地獄と化した街の端、そこに一人の哀れな少年の悲鳴が虚しく響いた…

それから30分後

二人は鱗斗の家に奏を運び、ベッドに寝かせている。道中、10体程のゾンビに出くわしたが、全て走ってスルーした。

冥也「奏ー？起きろー？」

奏の頬をペチペチと叩く。この時冥也は奏の寝顔に内心ドキドキしていた。

奏「ん…うん？…あ…めー君…」

冥也「おお！？やっと起き起きたかあっえっ！？」

奏はいきなり冥也に抱きついた。

狂走曲「約束」(後書き)

冥也「俺と鱗斗のキャラ、崩壊してないか？」

作者「大丈夫つす!!」

鱗斗「根拠は？」

作者「根拠？なにそれ？食えんの？美味しいの？」

冥也&鱗斗「不安だ(なあ)……」

人物紹介（前書き）

すいません・・・

4 か月以上放置してしまつて・・・

これからまたがんばります！

人物紹介

くろつめい
久遠冥也

2月29日生まれの18歳

身長 184cm

体重 60kg

好き 食べ物全て 奏

嫌い 無し

黒髪のサラサラヘア

細身だが筋肉質のイケメン

クールな性格だが奏が絡むと一転して取り乱す。

実はめちゃくちゃお人好しだがDS

小学生の頃、2月29日と4年に一度しか誕生日が来ないため、「わゝまだ3歳だゝ」と馬鹿にされてた

鱗斗達との約束を果たす為にアメリカに行っていたが帰省。そこで事件に巻き込まれた

作者との対話

冥也「俺の名前の由来って何だ？」

VAICE「テキトー」

冥也「…オイコラ…」

VAICE「後悔はしている。だが反省はしていない」

冥也「……はあ」

西条鱗斗（さいじょうりんとう）

身長185cm

体重78kg

5月5日生まれの18歳

金髪に染めた髪をツンツンさせている。

ヤクザ顔負けの強面に加え、筋骨隆々の某戦闘民族のような風貌だが言動や行動は中学生と同レベルなため、ついた二つ名が「ギャツプの化身」と言う意外に可愛い奴

自分でアルバイトして稼いだ金で子供達にお菓子を配っているため町内の人気は高く、商店街ではサービスしてもらったこともしばしばとある理由で躊躇いという思考がほとんど無いため、思いついたら即行動を基本としている。

<作者との対話>

鱗斗「ねえ…なんでモンハンのオトモアイルーに僕の名前つけてるの？」

V A I C E「ん…知らない♪（ハート）」

鱗斗「…殴って良いかな？」

せがわかなで
瀬川奏

身長 162cm

体重4j:奏「ころすヨ？」

11月25日生まれの17歳

好き 冥也 甘いもの

嫌い 冥也を傷つけるもの

少し茶色のかかったポニーテールに整った鼻梁　丸くくりくりした目の美少女

頭の中が常にお花畑な天然、頭の中には常に冥也があり、脳。メーカーで検索すると「恋」だけで脳が埋まったことのあるある意味実力者

天然＋美少女＋優しい性格とある完璧な為学校では「大天使」や「聖母マリアの娘」などと言われ、好意をよせる男子が多かったがいつもそばにいる冥也をみてことごとく諦めている

二重人格で冥也を傷つけるものに対しては一切容赦せず攻撃を加える暴力の鬼と化す

<作者との対話>

奏「私を作った理由って何？」

VAICE「え？テキトー」

奏「殺スよ？（イングラムを構える）」

VAICE「……………すみません」

嫌い 洋菓子

やや痩せ気味で坊主頭の純日本男児に見える「THE・日本人」常識人だが作者に背格好の描写を書かれぬまま行方不明になってしまったかわいそうな人

ちなみにバレンタインデーにチョコを貰ったことはなく、いつも饅頭をもらっている影のモテ男でもある

<作者との対話>

宗太「いくらなんでも紹介すらせずに消すって酷すぎる・・・」

VAICE「諦めろ、それがお前の人生なんだ」

宗太「いや、でもさあ・・・」

VAICE「くどいよ?」

宗太「・・・もういやだ・・・なんで俺なんて生まれたんだろ?・・・」

VAICE「俺がそういう風に作ったから」

宗太「・・・グスッ」

作戦会議（前書き）

鱗斗「ねえ…遅すぎないかな？」

VAICE「ごめんね？ストリートライブやってたりしてて」

鱗斗「ボイパできるのは知ってるけどさ……」

VAICE「いわき市の復興ライブも出たもんね」

鱗斗「……………次からは早くしてね？」

作戦会議

冥也が発狂してから1時間後、三人は作戦会議をしていた。

鱗斗「これからどうすんの？あの橋が壊れちゃった今、脱出の手段がないよ？」

鱗斗の言葉にあとの二人は黙り込む

奏「長いロープを使って海まで下りて逃げるってのは？」

冥也「無理だな、30m位なら確かに下りられるが問題はその後、着水のままむこうまでの約1kmを泳ぎ切れるとは考えにくい」

鱗斗「それにここらへんの海域にはサメみたいな凶暴な魚類がけっこういるからデンジャラス極まりないよ」

冥也「んじゃあそれは無理だな…」

奏「電話回線はこの街の中しか繋がってないしインターネット回線は完璧に切れてるから助けも呼べないね…」

冥也「…どうにかしてボートは造れないか？」

奏「あつそれは無理だよ、この街は人工都市で全部人工植林だからそんなに丈夫な木は無いしそもそも潮風で脆くなってるよ？多分すぐに浸水しちゃうと思うな」

鱗斗「それに金属の加工技術なんて持ってないから鉄とかでも造れ

ないな」

冥也「八方ふさがりってやつだな…」

三人は再び黙り込んだ。その眼には絶望が色濃く写っていた

その時冥也が何かに弾かれたかのように顔をあげた

鱗斗「？どしたの？なんか思いついたの？それともキリスト様でも見えた？」

冥也「今考えてみればこの水上都市、橋が壊れる可能性なんていくらでも考えられる！普通そういうことが考えられるなら何かしらの対策、つまり脱出するための手段がどこにあるはずだ！そして鱗斗は腐って死ね」

奏「なるほどね…確かにありそうだね…」

奏が冥也の発想に同調する

冥也「でも問題点が一つ、ソレが一体どこにあるのか…また、ソレは一体なんなのか…詳細が一切わからないということなんだよな…」

一旦明るくなりかけた雰囲気再び暗くなる

奏「ねえーめーくん？」

ふと奏が冥也を呼ぶ

冥也「ん？どうしたんだ？何か気づいたことがあるのか？」

奏「いや…鱗斗君が…」

奏がものすごい微妙な表情で部屋の隅っこを指さす

冥也&奏「……………」

鱗斗が部屋の隅っこで体育座りかと思えば何故かブリッジしながら
何事かを呟いていた

鱗斗「キリスト様キリスト様キリスト様キリスト様キリスト様キリ
スト様キリスト様キリスト様キリスト様キリスト様キリスト様キリ
スト様キリスト様キリスト様キリスト様キリスト様」

冥也「……………死ね」

とりあえず冥也は思いつきり鱗斗の腹にヒップドロップをかました

鱗斗「あべしっ!？」

それを見ていた奏がポツリと呟いた

奏「鱗斗君って…ザコキャラみたいね」

鱗斗「!!？」

再びハートブレイクした鱗斗

恐らくネットに詳しい人が見ていたらこういうだろう

「ちよwww鱗斗www涙目www」

「もうやめて!鱗斗のライフはもう0よ!」

それぐらい鱗斗は酷い状態だったwww

そんな鱗斗を尻目に二人は話し合いを続ける

冥也「んゝ…なんか手がかりはないかな…」

奏「うゝん…難しいね…」

冥也「そもそも脱出するとしたらどこからだろうっな？」

奏「そりゃあやっぱり海じゃない？どうにかして海の側まで下りるんじゃない？」

下りる……

その言葉に冥也は一つの考えが浮かんた

冥也「柱……か？」

奏「はしら？」

奏は首を傾げる

冥也「そう柱」

鱗斗「どゆこと？めーb o y？m eにt a l k i n gしてらんY

「O！」

鱗斗の首は一瞬で床に埋まった

その隣で冥也は涼しい顔で鱗斗の頭が埋まってる辺りに手をついている

冥也「さて……バカはほつといて続きな？」

あの街を支えている柱なんだが5本だけ太いやつがあるのは知ってるよな？奏？」

奏は首を縦に振った

冥也「その柱、太いのは主要なヤツだから仕方ないがいくらなんでも太すぎだったと思わないか？」

奏「確かに…アレは目算でも直径200mはあるわね…この街がいくら水上にあるからって大き過ぎるわよね…どうせならあの5本以外無くしてもいいのに…」

冥也「いや、無くしたら沈むわボケが」

奏「ほえ？そーかな？」

冥也は頭の中で「ダメだこりゃ…」と嘆いた

鱗斗「んで？その柱がどうかして奏「あれ？めー君、雑魚が復活したよ？」…酷いや」

鱗斗は再び沈黙してしまった

冥也「……説明をつづけるな？……いくらなんでも太すぎる、ということは柱の中に脱出の手段、もしくはその手がかりがあるかもしれないってことだ」

奏「なるほど……たしかにありそうな話しね」

冥也「だろ？とりあえず推測だが間違っていないと思う」

冥也はどこか確信に満ちた表情で頷いた

鱗斗「だね！……それじゃ……早速行く？」

冥也「そうだな……ネギ昆布」

鱗斗「誰！？僕！？僕なの！？」

冥也の隣で鱗斗は騒ぎはじめる

ネギ昆布「ねえ！？答えてよ！？しかもなんか誰かに何か大事なものを換えられた気がする！」

冥也「うるせーな……いくぞ……」

ネギ昆布「嫌だああああ！！！！！！！！」

かくして地獄は本番をむかえるのであった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6666r/>

伝染する狂気

2011年10月8日15時57分発行